

3 英語学習の取り組み

(1) 英語学習の必要性

現在、中教審教育課程部会において、小学校英語に関して「必修とするかどうか」「国語力育成との関係」「中・高等学校の英語教育との関係」「仮に必修とする場合、開始学年、教育内容、教材、指導者の確保、実施時期をどうするか」等について検討されているところである。

この背景には、経済・社会等のグローバル化が進展する中、子どもが21世紀を生きるために、国際共通語となっている「英語」のコミュニケーション能力を身に付けることが必要であり、国家的な重要課題になっていることが挙げられる。子どもの英語への関心も高い。

本校では、昨年度まで文部科学省の研究開発指定を受け、小学生に対して、中学校「外国語」の目標における「実践的コミュニケーション能力」の基礎を培うために、小・中の9年間を見通した英語カリキュラムの構築に取り組んでおり、すでに英語学習を週1時間実施している。そこで本年度は、そのノウハウを生かしつつ総合的な学習の範疇で英語学習を実施することとした。

なお、実施に当たっては、語学教育の専門性やALT等人的環境の面を鑑み、未来学習とは別に週1時間の英語学習の時間を固定し、年間35時間を設定することとした。

(2) 目標

中学校学習指導要領「外国語」の目標を基に、中学校3年生において、英語圏でのホームステイができるレベルをめざし、小学生の発達段階を考慮しながら観点を設定し、下記のように目標を定めた。

Overall Objectives			
外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すこと等の実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。			
Junior High School			
	コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力 言語や文化についての 知識・理解
中学校	コミュニケーションに関心をもち、外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	外国語を用いて、自分の伝えたいことを話したり、書いたりして表現することができる。	外国語を聞いたり、読んだりして、相手が伝えようとすることを理解することができる。 外国語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身に付け、外国語の背景にある文化を理解している。
Elementary School			
	コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力 言語や文化についての 知識・理解
高学年	英語によるコミュニケーションに関心をもち、英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする。	簡単な英語や動作を用いて、表現したり答えたりすることができる。	簡単な英語を聞いたり文字や物と結び付けて読んだりして、相手の伝えたいことを理解することができる。 英語と日本語の使い方の違いや外国のくらしなどを理解している。
	コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力
中学年	英語を使った活動に関心をもち、自分から進んで参加しようとする。	簡単な英語や動作を用いてゲームをしたり答えたりすることができる。	簡単な英語を聞いたり物と結び付けて読んだりして、相手の伝えたいことを理解できる。
	コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	表現・理解の能力	
低学年	英語の環境の中で、抵抗なく遊ぼうとする。	英語の音に慣れ親しむとともに、簡単な英語を用いて、ゲームを楽しむことができる。 ※ 第1, 第2学年は、生活科から12時間、その他23時間を学校裁量の時間より確保し、「えいご」として実施していく。	

(3) カリキュラム

9年間を俯瞰した上で小学校の英語カリキュラムを作成する際、「言語の機能」中心の中学校カリキュラムに対して、小学校では子どもの発達段階を考慮し、「言語の内容（語彙）」を中心としたカリキュラムを編成することにした。

各月の題材については、子どもの英語に対する意欲や他教科・他領域の学習内容、季節や年中行事等と関連させながら設定した。

なお、それぞれの題材において指導する語彙は、中学生にニュージーランドでホームステイ体験をさせたときの資料、中学校の教科書で扱われている英単語、ネイティブ・スピーカーが日常生活で用いている使用頻度の高い語彙を組み合わせて配列している。

以下に示すものは、各月の題材配列と扱う語彙（5月）である。

学年毎の内容	月毎の内容	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
		人		人とコミュニケーション		人と自然		人と文化				
人	1,2年	家族	身体	数	色	空	動物	乗物	衣服	テレビ	料理	デザート
人とコミュニケーション	3,4年	店	買物	月日	時間	季節	昆虫	ゲーム	本	教科	家	まち
人と自然	5,6年	花	天候	野菜	海	大地	木	健康	行事	旅行	外国	職業

Theme	Grade	May		
		Vocabulary	Story telling	Activity
body	1	body, shoulder, toe head, ear, nose, hair neck, knee, eye, leg mouth, arm, hand	This is a ~ . What? Please touch ~ . Don't touch ~ .	Where's Spot? ・タッチゲーム 教師の英語を聞き、自分や友達、先生の体にタッチする。
	2	left, right, elbow waist, feet, face back, tooth, finger heel, ankle, bottom	This is a ~ . What? Please touch ~ . Don't touch ~ .	
shopping	3	one, two ... fifty banana, orange peach, pineapple watermelon, pear apple, mango avocado	How much ? It's ... dollars.	Brown Bear, Brown Bear, What do you see? ・シミュレーション 教師が店員、子どもが客になり、英語で買い物を楽しむ。値段は、全て整数ドル。
	4	fifty-one, fifty-two, ... one hundred pizza, fried chicken potato chip, doughnut cookie, chocolate yogurt, juice, milk	How much is this? It's ... dollars and ... cents.	
weather	5	weather, fine cloudy, rainy snowy, cold, cool warm, hot, coat raincoat, gloves umbrella, scarf, hat	How is the weather? It's ~ .	"Sly Fox and Red Hen" ・ジェスチャーゲーム 教師や子どもが天候や気温をジェスチャーで表現し、その状態を表す英語を考え、書き写す。
	6	sunny, icy, clear stormy, foggy windy, chilly freezing, ... degrees minus ... degrees sweater, cardigan pajama, boots	How is the weather? It's ~ .	

<各月の題材配列と扱う語彙（5月）>

(4) カリキュラムの具現化にあたって

① 文字の取り扱い

現在、「中1ギャップ」と呼ばれる小学校教育と中学校教育の間の壁が存在していることが頻繁に話題となっている。英語について言えば、その壁の大きなものが以下の2点であると考えられる。

1点目に、ローマ字と英語の綴り方の違いによるギャップである。子どもは、小学校第4学年の学習で、日本語の音を新しい文字「ローマ字」を使って表すことができるようになる。しかし、英語で使う文字「アルファベット」での綴り方は、これとは異なるのである。

2点目は、小学校と中学校における英語の学習方法の違いによるギャップである。ALTやJTEの発音する英語表現をそのまま身に付けていた小学校に対し、中学校では学習した英文法をもとに新しい英文を生み出すことが要求される。また、その新しい英文生成には、「文字を読む」「文字を書く」ことが必要不可欠なスキルとして求められる。

これらの点から、小学校・中学校間の急激な学習のシフトに、子どもはとまどいを覚えていると考えられる。

それでは、本校の場合はどうであろう。子どもたちに対して行った調査では、以下のような結果が得られた。

＜文字を提示したり書いたりすることが、オーラルコミュニケーションに与える効果＞

この調査では、「文字を書き写す活動を行う学級」と「文字を書き写す活動を行わない学級」を設定し、授業後に面接を行い、発音によって、新出単語（容易な単語、比較的難しい単語、容易であるが発音が日本語と大きく異なる単語）の定着率を調査した。

第4学年

書き写しを行った学級の定着率が高い。発音に関しては、両学級ともほぼ同じ結果であった。比較的難しい単語についての定着率は、書き写しを行った学級が35%、書き写しを行わない学級が18%であった。

第6学年

書き写しを行った学級の定着率が高く、発音に関しても同じ傾向がある。容易な単語の定着率は、両学級とも90%を超えていたが、比較的難しい単語の定着率は、書き写しを行った学級が71%、書き写しを行わない学級が46%であった。

＜「文字を書く」ことに関する実態調査＞

この調査では、ローマ字には見られない末尾が子音で終わる単語（lunch, pencil等）を取り上げ、「l」「ch」等、英語のスペルを意識して書こうとしているかどうかを絞って分析を行った。

第4学年

ローマ字を学習した直後であり、聞いた音をローマ字を用いて表そうと試みる子どもが多く見られた。特に、末尾のスペルを母音にする事例が多かった。また、どう表記してよいか分からず、空白の者も多くいた。

第5学年

どの単語に関しても、末尾のスペルが子音で終わることを意識して書いている子どもが40%前後見られる。しかし、「l」「th」等、ローマ字や日本語にはない音に関しては、記述できていない者の割合が高かった。

第6学年

約半数の者が、各語の末尾が子音で終わることを意識して書けている。また、「l」や「th」等、日本語にはない音を聞いて、それをローマ字ではなく英語で書こうとする様子が見られる。つまり、ローマ字と英語の表記上の相違点を認識し、英語で表そうとする意識をもっていると考えられる。

これにより、本校の子どもは、

○ 「文字を見て、書く」ことで、オーラルコミュニケーションの能力を向上させることができる。

○ 高学年においては、日本語にはない英語の発音を聞き取ることができる。

○ 高学年においては、英語特有の発音を英語で綴ろうとする意識をもつことができる。

ということが分かった。

さらに、「英語を書くこと」に関する意識調査では、第6学年の子どもの過半数が「書くこと」を英語学習に取り入れて欲しいと望んでいた。

そこで、カリキュラムの実施にあたっては、これらの実態をふまえ、コミュニケーションの能力をより効果的に向上させるために、「文字を提示する」「文字を書く」活動を取り入れていくこととした。以下の3点は、その際の留意事項である。

ア 「読む」「書く」については、それを評価することはしない。

イ 新出単語を提示する際には、絵と文字を併用して提示するが、文字を読ませることはせず、あくまで自然に文字が意識されるようにする。

ウ 緩やかに段階的に文字を書く活動を取り入れていく。

- ・ 第3学年及び第4学年の書く活動は、1文字ずつ書き、発音する程度の活動とする。

- ・ 第5学年は、末尾が母音で終わる単語を中心として書く活動を取り入れる。

- ・ 第6学年は、末尾が子音で終わる単語や、「l」、「th」等の発音を含む単語も書く題材として導入していく。

② ALT, JTE, HRTの役割

カリキュラム実施にあたっては、ALT（ネイティブな発音ができる外国人の講師）、JTE（中、高等学校で英語指導の経験のある講師）、HRT（学級担任）の3人を組み合わせたT・T指導の体制で、授業を行っている。

教師	授業の中での役割	月のカリキュラム実施上の役割			
		第1週	第2週	第3週	第4週
ALT	新しい教材についてネイティブな発音で、全て英語で指導する。	T 1		T 1	
JTE	ALTの指導を復習する。基本的に全て英語で指導を行うが、子どもの実態に合わせて柔軟に日本語での説明も加えていく。		T 1		T 1
HRT	子どもとALTのコミュニケーションの仲介、モデルになって活動する等の授業の雰囲気作り、記述による個の評価を行う。	T 2	T 2	T 2	T 2

<ALT, JTE, HRTの連携>